



日時：2021年6月22日（火）、19：00-20：30

オンライン(zoom) <https://us06web.zoom.us/j/82107955784?pwd=SUxWVUlXS25OZ0pjdlBSWmFGWTV4UT09>

ミーティング ID：821 0795 5784 パスコード：Matsumoto

東京への一局集中が進んでいる。しかし、このままでは災害、食料危機、エネルギー枯渇などに対して脆弱な社会になる。レジリエントな社会のためには、地方分散、地方自立・自律、食料自給などが必要である。松本市は10年計画のビジョンを作成したが、そこには地方都市のあるべき姿が含まれている。作成に携わった山本達也氏に話を伺う。

## 右肩上がりの社会モデルから自律的に自立した循環型 地方都市モデルへの組み替えに向けた地方自治体の役割 ～松本市基本構想 2030 策定プロセスをめぐる事例を中心に～

講師：山本 達也

**講演要旨：** 長野県松本市では、行政の持つ各種計画の最上位に位置する基本構想（10年計画のビジョン）の策定プロセスを、従来型のものから一新し、行政の論理ではなく各分野の専門家かつ市民の目線から練り上げる方式を採用しました。本報告の報告者は、松本市基本構想 2030 市民会議の座長として、「右肩上がりの社会モデルを前提としない」という合意を各委員が共有するところから、この基本構想の議論をはじめました。出来上がった基本構想は、素案の発表として行った市民フォーラムのコメントーターであったコミュニティ・デザイナーの山崎亮さんに「過去に見たことがない。他の自治体に見られない画期的な形式と内容になっている」と高く評価して頂きました。



なぜ、松本市はこのタイミングで、こうした前例を見ない画期的な基本構想を打ち出すことができたのでしょうか。そして、その舞台裏ではどのようなことが行われていたのでしょうか。また、基本構想を受けて、今、松本では「次の時代へのシフト」に向けてどのような課題を抱えながら、どのような動きが起きているのでしょうか。

「成長の限界」が顕在化している今、循環型をベースとした地方都市モデルへの移行は、この先、全世界で数多くの自治体に取り組むことになる政策課題です。松本市の事例は、先行事例としていくつもの示唆を含んでいるように思われますし、「ミュニシパリズム」のこれからを考える上でも有用だと思われます。

### 山本達也氏のプロフィール

清泉女子大学地球市民学科教授。松本市基本構想 2030 市民会議座長を務める。博士（政策・メディア）。専攻は、国際関係論、公共政策論、社会変動論。技術と社会変動に関する政治と政策に関する論考を数多く発表している。著書に、『暮らしと世界のリデザイン：成長の限界とその先の未来』（花伝社、2017年）など多数。2018年より、無料メルマガ「山本達也の半歩先通信」を書き続けている。 <https://www.tatsuyayamamoto.com/>

**参加登録：**松久 ([h.matsuhisa@shukusho.org](mailto:h.matsuhisa@shukusho.org)) まで連絡願います。非会員の方は、松久まで氏名と所属などをお知らせ願います。参加費は無料です。